

壊れた橋

先

日、中国の東北部にある遼寧省（りょうねいしやう）に行った。訪れた丹東市（たんとうし）は、人口242万人で、国境をなす鴨緑江（やろくかう）の岸に位置します。鴨緑江沿いの道は、夜になるとレストランなどのネオンや、川に架かる2つの橋が観光地らしく派手に電飾されていて、とても明るいです。しかし、対岸を見ると明かりがほとんど見えません。そこは北朝鮮です。

翌朝、ガイドに再び2つの橋を案内してもらいました。一方は、中朝友誼橋（ちゅうちゆういしやう）と呼ばれ、北京とピョongyang（ピョウヤング）を結ぶ列車や貨物を積んだトラックが行き交います。約100メートル離れたもう一方の鴨緑江断橋（やろくかうだんきやう）は、途中で落ちており、石の橋脚だけが対岸まで続いています。日韓併合（にっかんへいごう）があった翌年の1911年に日本によって架けられましたが、朝鮮戦争中の1950年に、米軍の爆撃で壊れてしまいました。

現在、この壊れた橋は、観光スポットの一つとして整備され、橋の落ちた所まで歩けます。先端まで行くと、対岸の建物や観覧車などがよく見えます。ただ「あの国」ということだけで、じっと見つめたり、人の姿を探したりする自分をやましく思いましたが、気づくと他のツアー参加者も目を細めて眺めたり、写真を撮ったりしていました。日本では、友人との話題に、北朝鮮がのぼることはほとんどないので、関心がないと思ひ込んでいました。しかし、こうして集団で凝視している様子を見ると、興味を持っている人は多いかもしれないと思いました。私はそのとき、もう1つの「橋」のことを考えさせられました。旅行に来る前、友人に中国と北朝鮮の

アダム見聞録

ADAM・KENBUNROKU



国際交流員 アダム・シモンズ



▲途中で橋が落ちている鴨緑江断橋

国境の街に行くと言っただけで、心配されました。日本だけでなく多くの国で、北朝鮮に関する問題が、長い間ニュースなどで取り上げられているので、友人が国名を聞いたら、すぐ「危険」と思ってしまうのも無理ありません。マスメディアなどで、ある国の一部分だけを問題視し、取り上げられることで、社会の視点が決まることが多い気がします。

問題の深刻さを否定するつもりはありません。ただ、報道だけで外国の姿を「知った」と納得してしまつと、理解し合うための心の「橋」が落ちてしまいます。政府レベルでは、理解し合うのが難しく、「橋」が修復されそうになくても、私たち一人ひとりがその国に少しでも興味を持ち、もつと知ろうという心を持てば、いずれ自分の国の人と相手国の人の不理解から生まれた距離を縮める「橋」ができるでしょう。

『広報おおぶ』2010年1月1日号

純粋な心

年

末にオーストラリアに帰国しました。今回の帰国で、特に楽しみにしていたのは、昨年5月に生まれた姪に会うことでした。帰国している間、一緒に生活するので、とにかく僕の顔を見て泣かないようにと、心の中で祈っていました。

初対面するとき、姪と顔を合わせると、幸い泣かれませんでした。笑顔で迎えられたわけでもなく、「このオッサンはだれだろう?」と考えているような、不安げな顔をされました。

姪が初めて、祖母の顔を見たときは、大泣きをしたそうです。そんな祖母は、姪が僕の弟のガールフレンドのエステイさんに初めて抱っこしてもらったとき、何の抵抗も示さなかったことを不思議に感じたようです。エステイさんは、南アフリカ共和国出身で、私の家族より肌の色が茶色いので、祖母は、姪がエステイさんの肌の色に驚いて、嫌がってしまうことを心配していたようです。

人間は、いつから人種の違いを認識するのでしょうか? 祖母は、どうやらこう考えていたようです。赤ちゃんでも、自分と同じ人種の人は安心するが、ほかの人種の人に対して抵抗を感じるの、人間の本能で、成長していくなかで少しずつほかの人種の人に慣れていくのだと。そのとおりなら、人間は生まれたときから、人種の違いを認めているということになります。

しかし、生後7カ月の姪が、エステイさんの肌の色を認識していたとしても、それで不安を感じて嫌がった様子がなかったことを考えると、実際は祖

母の予想と異なるかもしれないと思いました。そして、人間は生まれたとき、人種の違いに関して白紙であるのに、成長していくに従い、その違いを意識していく気がします。色を意識するころ、肌の色の違いも意識するようになるかもしれません。しかし、自分と違う肌の色に抵抗を感じるか感じないかは、育つ環境の中で、家族や友人、テレビなどに与えられるイメージに影響されるものだとも思います。もし、世の中の人はずっと赤ちゃんのような心を持っていれば、どんな世界になるでしょう。自分の思考や行動の中で、偏見によって判断していることを見直すことで、肌の色などによって感じていた人と人の心の距離を縮めることができると思います。そして、姪が相手の肌の色で判断しない純粋な心を持ち続けられるよう、妹には大事に育ててもらいたいです。

アダム見聞録

ADAM・KENBUNROKU



国際交流員 アダム・シモンズ



▲純真無垢な笑顔を見せるアダムの姪

『広報おおぶ』2010年2月1日号

アダム見聞録

ADAM・KENBUNROKU



国際交流員 アダム・シモンズ



▲アダムの想像するバンイップ

その「ビッグキャット」の伝説のほかに、遙か昔から先住民アボリジニの間で伝わった未確認動物の話もあります。最も知名度が高いのは「バンイップ」という「怪物」です。河や沼地に出没すると言われている「バンイップ」の外見は、証言者によって大きく異なります。一部の先住民の言い伝えでは、「バンイップ」を巨大ヒトデのようと言った人もいまし

ませんが、オーストラリアでは、真つ黒な巨大な猫のような未確認動物は「ビッグキャット」と呼ばれ、何十年前からオーストラリア東南部のあちこちで同じような動物が目撃されていた情報があるそうです。その「ビッグキャット」と呼ばれる動物は、ある説では、第二次世界大戦中にオーストラリアに駐留していた米軍隊のマスコットとして連れていた豹の子孫ではないかとも言われています。

私が、森の中で見た生物の正体は、未だにわかりませんが、オーストラリアでは、真つ黒な巨大な猫のような未確認動物は「ビッグキャット」と呼ばれ、何十年前からオーストラリア東南部のあちこちで同じような動物が目撃されていた情報があるそうです。その「ビッグキャット」と呼ばれる動物は、ある説では、第二次世界大戦中にオーストラリアに駐留していた米軍隊のマスコットとして連れていた豹の子孫ではないかとも言われています。

本でも、カップパツチノコなどの未確認動物が語られているように、オーストラリアにも想像上なのか実際に存在するのかわかりませんが、未確認動物に関する伝説があります。

日

謎の生き物の森

た。19世紀の新聞には、その目撃証言として、犬のような顔に牙、黒い毛皮、水かきなどが「バンイップ」の特徴であると紹介されました。そのほかにも、川の上流まで上ったアザラシの見間違ひではないか、という説や、コアラやウオニバットの祖先と言われている絶滅した大型有袋類動物ディプロドンという説もあります。

僕が、あの森で見たものは豹か、「バンイップ」か、それとも着ぐるみを着た誰かのイタズラかはわかりません。でも、あのとき感じたドキドキは、未確認動物が現れるかもしれないと思えるような森で遊んでいた日々の貴重な思い出の一つです。ゲームではきつとできない、豊かな自然の中での体験を思い出すと、僕が子どもころは、本当に恵まれていたと思います。



文化国際課
☎ (45) 6266

アダム見聞録

ADAM・KENBUNROKU



国際交流員 アダム・シモンズ



▲アボリジニアナング族の聖地「ウルル」

もう1つの理由は、地元の先住民アボリジニーのアナング族の聖地であることです。そう考えると、ウルルに登ることは、観光客が自分の先祖のお墓に登って騒いでいることと同じような感覚でしょう。

その理由の1つは、安全面です。強風が吹いたり、急な坂で滑りやすいことなどです。記録が残っているだけで少なくとも35人の観光客が登る途中で命を落としています。

世界各国から観光客が訪れるウルルは、世界一大きい一枚岩と言われています。人間は何故か「世界一大きい〇〇」と聞くと、登りたくなるようです。ウルルの場合、オーストラリア大陸の真ん中に位置し、交通の便が悪いので、余計に登りたくなるのも無理ありません。しかし、ウルルに登ることを楽しみにしている観光客にとって、驚く内容の書かれた表示板が登り口にあります。それは、「登ることを遠慮するように」と呼びかけているものです。

他の文化を理解し、みんなが暮らしやすいまちとなるよう、国際交流やさまざまな文化との交流・共生をテーマに、国際交流員のコラムと多文化共生のためのワンポイント講座を紹介します。



文化国際課
☎(45)6266

ウルルでの『敬意』の表し方

オーストラリアの有名な世界遺産といえるウルル（エアーズロック）でしょう。最近、ウルルに登った女性観光客が、ウルルの上で全裸になった動画をインターネットで公開し、オーストラリアで騒ぎになりました。報道によると、ウルルを見守ってきた先住民アボリジニーの代表者が、国外追放を呼びかけるなど、騒ぎの張本人は大きな批判を受けました。その観光客はウルルの上に到達したら、感動のあまり服を脱いだなど、侮辱ではなく先住民の伝統文化への敬意だと主張しました。

しかし、彼らは、聖地に登られる怒りより、自分たちの土地を訪れる人が怪我をしたり、命を落としたりすると、大変な悲しみを感じるようです。アナング族の人たちは、観光客にウルルに登るより、ウルルと大地に耳をすませてほしいと言います。登ったという達成感や自己満足より、ウルルと大地が、地元の先住民にとってどのような存在かを感じて知ってもらうことを望んでいるようです。

騒ぎのもとになった観光客の主張には、理解し難いところがあります。先住民の伝統文化を尊重するのなら、自分勝手な民族文化のイメージで判断するのではなく、そこに暮らすアナング族の想いに耳を傾け、登ることをやめるべきだった気がします。そして、自分のふるまいが相手にどう受け取られるか、事前に確認するべきだったのではないのでしょうか。

『広報おおぶ』2010年8月1日号

アダム見聞録

ADAM・KENBUNROKU



国際交流員 アダム・シモンズ



▲東ティモールなどのパビリオン

上海万博の出展国は、愛知万博の121カ国を上回り、192カ国（香港、マカオを含む）という主催国の経済力も外交力も見せつけられる数です。私にとって、

関係構築しようと、一生懸命アピールしようとしていることがよくわかります。

上海万博の会場は5平方キロメートル以上あります。とにかく広いので、滞在時間が限られている方には、見たいパビリオンやアトラクションを絞ることをお勧めします。そのサイズは会場の広さだけでなく、パビリオンの大きさも違います。例えば、赤い逆さまのピラミッドのような中国館はテレビでよく見ますが、その大きさは、テレビでは伝わりません。私が見た韓国やオーストラリアのパビリオンの外観も愛知万博のときのものより大きいです。また、館内の展示やパフォーマンズを見て、出展国政府の予算も多くなつたように思いました。今後、中国とのよりよい関係を構築しようと、一生懸命アピールしようとしていることがよくわかります。

『広報おおぶ』2010年9月1日号



文化国際課
☎ (45) 6266

他の文化を理解し、みんなが暮らしやすいまちとなるよう、国際交流やさまざまな文化との交流・共生をテーマに、国際交流員のコラムと多文化共生のためのワンポイント講座を紹介します。

上海万博

7

月末、上海万国博覧会を訪れました。愛知万博を懐かしく思う人は、きっと上海万博も楽しめると思います。世界各国のパビリオンや料理、笑顔で頑張るボランティア、何時間も並び行列など、会場の雰囲気は愛知万博に似ています。そして、愛知万博と同じように、上海でも熱心な万博ファンが、パスポートに訪れたパビリオンのスタンプをアテンドに押してもらつたところをよく見かけました。

上海万博の特に良いところは、愛知万博に出展していなかった国のパビリオンや展示が見られることです。東ティモールやミャンマーの展示は、待たずに見られました。建国から数年しか経っていない、初めて万博に出展した東ティモールのコーナーでは、アテンドと話をしながら、自然や生活を紹介する映像を見ることができました。

万博で、東ティモール、ミャンマーなどの馴染みのない国の展示を見たからといって、その国のことを理解したとは言えませんが、どんな国かは少しイメージできました。上海万博も、愛知万博と同じように、来場者は、自分の国に誇りを持つとともに、他国を知るきっかけになっているに違いありません。世界の見識を広げようとする人が多くいることが、上海万博の成功につながるのではないかと思います。

アダム見聞録

ADAM・KENBUNROKU



国際交流員 アダム・シモンズ



▲ポート・フィリップ市民団と大府市民との料理交流会に参加した皆さん

市民団員は、市内でホームステイし、大府の一般家庭での生活を体験しました。市民団員の話や、一般家庭と言っても、大府にはさまざまな家庭があることが印象的だったようです。マンションでホームステイした人もいれば、一軒家で3世代家族に受け入れてもらった人やホストファミリーが牛を飼っていることに驚いた人もいました。大府を離れたあとも、市民団員はホームステイの間にあったハ

ほとんどの市民団員は、初めて大府を訪れましたが、石ヶ瀬小学校と姉妹校のセント・キルダ小学校や大府東高校と姉妹校のエルウッド・カレッジの学校間の交流に自分の子どもが参加していたり、大府市民を自宅で受け入れたことのある人など、何らかの形で大府とつながりを持っている人もいました。ある市民団員と大府市民が再会したときの笑顔を見て、17年も経てきた姉妹都市交流が、さまざまなところで大府市民とポート・フィリップ市民をつないでいることを実感しました。

ブニングやホストファミリーを思い出して語り合っていました。大府の家庭で、家族の一員として過ごした時間が今回の日本滞在の貴重な思い出の1つとなったようです。

オーストラリア旅行が簡単になつた時代には、姉妹都市交流の意味が問われるかもしれません。また、姉妹都市提携が、物見遊山の機会として批判されることもあります。しかし、今回大府を訪れた人々にも、関わった大府市の人々にとっても、観光ではできない経験や発見ができ、相手への理解が深まったと思います。本来、姉妹都市交流によって相互理解が深まり、お互いの文化を尊重し合い、お互いから学び合うことができるはずです。そうした交流を積み重ねたとき、姉妹都市提携は、まちの財産となることでしょう。



文化国際課
☎ (45) 6266

他の文化を理解し、みんなが暮らしやすいまちとなるよう、国際交流やさまざまな文化との交流・共生をテーマに、国際交流員のコラムと多文化共生のためのワンポイント講座を紹介します。

8 ポート・フィリップ市民団 の大府訪問

8 月29日から9月2日にかけて、大府市の姉妹都市であるオーストラリアのポート・フィリップ市から、フランク・オコナー市長など3人の公式訪問団と8人の市民団が大府市を訪れました。大府市での滞在の間、市制40周年記念式典に出席したり、市内の小学校や保育園を視察し、それぞれの制度の共通点や相違点について学びました。また、歓迎イベントや料理交流会で大府市民との交流も深めました。

アダム見聞録

ADAM・KENBUNROKU



国際交流員 アダム・シモンズ



文化国際課
☎ (45) 6266

平成22年9月で、アダム・シモンズ国際交流員は
退任いたしましたので、「アダム見聞録」は今回が、
最終回となります。また、最終回の特別版のため、
多文化共生のためのワンポイント講座は、今回はお
休みとなります。
次回12月1日号からは、文化国際課で実施してい
る外国語相談の相談員のコラムを連載します。

お世話になりました

平

成13年2月から今年9月末まで、市役所で
「国際交流員」を勤めさせていただきまして
私が担当する最後の記事ということに機に、私が見
た大府の「国際交流」や「多文化共生」を振り返っ
てみたいと思います。

私は「国際交流」という表現は苦手です。という
のは、他国の人と交流することに反対しているの
ではなく、「国際交流」のような表現が存在するくら
い、意識をして他国の人と交流する、しないを選択
できるという考え方に強い違和感を感じます。

これまでに何度か書きましたが、母国オーストラ
リアは移民の国で、「多文化社会」と言われるほど、
日常生活の中で異なる国・民族・宗教など、文化的
背景の違う人と一緒に勉強したり、仕事したり、遊
んだりします。意識して他国の人を探さなくても、
自然にさまざまな人と交流し、さまざまな国や民族
の文化に触れることができます。つまり、さまざま
な文化を持つ人たちがともに生活すること「多文化
共生」によって生まれる自然な交流と違って、「国
際交流」は不自然に感じます。

「国際交流員」という職が設けられているのは、大
府に日本人以外の人は少なく、他国の人と接する機
会がほとんどないのだと思っていました。しかし、
実際に着任してみると、市内に住んでいるさまざま
な国の人びとに出会いました。市内に外国人市民が
たくさんいるのに、なぜこの仕事のために、私をわ
ざわざオーストラリアから呼んでもらえたのか、少

し不思議に思いました。

そうした中で、私に求められているのは、市民に
「国際的な感覚」を身につける機会を与えることだと
感じました。「国際的な感覚」の定義は簡単には説明
できませんが、いざにして世界を意識することが
大切だと思います。日本も何百もの国の中の1つなの
で、近隣の国も、遠くの国も意識すべきでしょう。そ
れだけでなく、自分の住んでいる周囲の外国人市民を
意識することも大切です。大府には、どちらにも意識
を持っている人が多くいるということに驚きました。

例えば、市国際交流協会の日本語教室で外国人市民
に日本語を教える人、ポルトガル語・中国語・スパン
イッシュ語・英語で生活に役立つ情報誌を発行している人、
日本の一般家庭での生活を外国人に体験させるホスト
ファミリーなど、世界を意識しながら、身近にいる外
国人市民とともに生活していることにも意識して、お
互いに安心して暮らせる道を探そうとしています。お
かげで、自然な交流への壁である言葉や生活習慣の違
いを乗り越え始めています。このような活動に関わる
ボランティアは、大府の誇りだと思います。

「アダム見聞録」がきっかけで、多くの市民の皆
さんに声をかけていただき、交流ができました。多
くの方に仲良くしていただけたことによって、市役
所だけで仕事していたら思いつかなかった考え方や
、多くのことを教えていただきました。

私の言いたいことがわかりにくい記事も多かった
と思いますが、読んでいただいた方に、別の視点か
らものを見るきっかけとなつたならば、大変うれし
く思います。

お世話になりました。ありがとうございました。